ISSN 1341-4364

近世哲学研究

第 14 号

ヒュームの認識論についての覚え書き　――　小林　道夫　1
――デカルトの認識論との対比において――

ライプニッツの創造論（一）　――　福谷　茂　15

無制約者と知的直観（一）　――　浅沼　光樹　36
――『ティマイオス註解』から『自我論』へ――

2010

近世哲学会

編集後記

ようやく『近世哲学研究』第一四号を刊行することができた。どのような理由があるにせよ、刊行遅延は好ましいことではない。小林道夫先生をはじめ早くから原稿をお預かりしていた方々、創刊以来本誌刊行にご協力くださり応援を頂いた方々、本誌の行く末を見守ってくださった方々に深くお詫びをしなければならない。ひとえにご海容を請うものである。とはいえ、編集後記の執筆者としては、なんとかここまで漕ぎ着けられたことにホッとしていることも事実である。印刷コストを安くする工夫と財政的な裏づけを組み合わせた新しいシステムによる再出発をここにご報告できることを喜びたい。本号制作のため貴重な時間を割いて編集実務にあたられた諸氏には厚くお礼申し上げるほかない。今後は年一回刊行のペースを取り戻し、今まで築き上げた高いクォリティを失わずに、持続可能な成長をめざしたいと願う次第である。

二一世紀の最初の十年が終わり、哲学界のシーンにも二〇世紀とはおのずから異なった動きが現れている。手前びいきかもしれないが、哲学とはなにか、哲学はなにをすべきか、ということに関して古典哲学と形而上学に発言権が復活してきたように見える。あきらかに「形而上学に対して侮蔑を示すことが時代の流行」ではもはやない。しかし分析哲学のなかでも控えめに使われはじめたこの形而上学というタームをどのように遇すればよいのか、ほかならぬ分析系の当事者間ではまだ定見ないし合意は成立していないようだ。ひとつの部門ないしは観点として着地してゆくのか、それとも哲学という学問の内外にわたる変貌をもたらすのか、今後眼が離せない状況である。もとより後者が成就するためには形而上学自身もまた旧套を脱する過程が伴っていることだろう。背景としてはなにによりこの十年で日本哲学史研究という分野が制度的に確立したことが大きく作用するはずである。二一世紀のこれからの展開は近世哲学史の研究者にとって非常にスリリングなものになるかもしれない。本誌はささやかではあるが、古典的な形態において哲学がいかなるものであったかという尺度を提供する場となることでアシストしたいと願っている。微衷をご賢察いただきお励ましとご叱正をいただければ幸いである。

最後にひとつお知らせしたいことがある。近世哲学研究史研究室ではこのたび紀要として『PROLEGOMENA』を創刊した。こちらはオンライン雑誌という形態であり、大学院在籍の三名の論文が掲載されている。うち二編は欧文で執筆されている点も含め、『近世哲学研究』の読者にはぜひこちらもご一覧を賜り、ご指導を仰ぎたく願っている。

（F）

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（一九九四）

祝辞　酒井　修

ハイデッガーにおいて哲学を　田中　敦
——現存在の現象学的存在論考究——

カントと初期フィヒテとの接点　北岡　武司

義務論としてのカント倫理学　蔵田　伸雄
——功利主義との対比——

仮象と反省　山脇　雅夫
——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために——

第二号（一九九五）

カント哲学における「経験」概念について　福谷　茂
——「世界」概念導入のための端緒として——

ヘーゲルのコルポラツィオーン論　早瀬　明
——市民社会の団体主義的変革に向けたヘーゲルの試み——

工学はどういうタイプの学問か　齊藤　了文

信仰の情熱とその逆説　田中　一馬
——キェルケゴール『おそれとおののき』におけるアブラハム解釈をめぐって——

ハイデッガーのヘーゲル解釈　橋本　武志
——意識の二義性と意識の転換——

第三号（一九九六）

『全知識学の基礎』の到達点　子野日俊夫

読書人世界から学者共和国制度へ　福田喜一郎
——理性を制度化しようとしたカントの試み——

デカルトにおける愛の区別について　武藤　整司

未済の人倫　石田あゆみ
——『精神の現象学』主—奴論の一解釈——

ガダマーのディルタイ批判　折橋　康雄
——『真理と方法』を中心に——

第四号（一九九七）

一本の綱（Seil）としての人間　吉川　康夫
——ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題——

デカルトの懐疑について　安藤　正人
——『省察』の「反論と答弁」を資料として——

市民と国家の媒介　小川　清次
——「国民」形成の一側面——

『存在と時間』に於ける可能性概念の多義性について　橋本　武志

自然主義的存在論の隘路　次田　憲和
——フッサールの「領域的存在論」における超越論的構成の「自己関係的構造」——

第五号（一九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」　武藤　整司
——デカルト的行論の一考察——

ディルタイに於ける客観的精神の概念について　折橋　康雄
ハイデガーの他者論　安部　浩

第六号（一九九九）

デカルトにおける《真理》と《存在》
——明晰かつ判明に知得されるもの——　倉田　隆
ヘーゲルの根拠論
——知と存在との相即——　山脇　雅夫
「第五省察」の隠された論理　次田　憲和
——フッサール『デカルト的省察』における「他者構成論」理解のための一視座——
シェリング哲学の出発点　浅沼　光樹
——人間的理性の起源と歴史の構成——

第七号（二〇〇〇）

——薗田　坦教授　退官記念号——
薗田　坦教授　略歴・業績一覧
《講演》
近世哲学における神の問題　薗田　坦
近世哲学とはなにか
——新しい哲学史像のために——　福谷　茂
人間の輪郭
——その曖昧さを擁護するために——　武藤　整司
知の自己吟味
——『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について——　山脇　雅夫
ハイデッガーの良心論再考
——可能性概念を手がかりに——　橋本　武志
生と音楽
——ディルタイに於ける生と音楽の時間性の問題をめぐって——　折橋　康雄

第八号（二〇〇一）

自由の軌跡
——批判哲学における自由の可能性の意味——　北岡　武司
認識か解釈か
——新しい哲学史像のために（二）——　福谷　茂
G・ハーマン相対主義説の論理　田中　一馬
歴史的理性の生成
——シェリング『悪の起源』における神話解釈の意義——　浅沼　光樹
《書評》
北岡武司著『カントと形而上学—物自体と自由をめぐって』　橋本　武志
N・ケンプ・スミス著（山本冬樹訳）『カント『純粋理性批判』註解』　長田　蔵人

第九号（二〇〇二）

『存在と時間』と哲学の方法（形式的挙示再考）　田中　敦
フッサールにおける他者経験の構造と発生　榊原　哲也
ウィトゲンシュタインの「規則に従う」論の若干の考察　子野日俊夫
復古のもとでの立憲主義
——ヘーゲル法哲学講義（ベルリン一八一九／二〇年）の二つの講義録——　竹島あゆみ
《書評》
ヤーコプ・ベーメ著（薗田　坦訳）『アウロラ—明け初める東天の紅』　福谷　茂

第一〇号（二〇〇三）

十年の歩みを顧みて　薗田　坦

デカルトと自覚の問題
——コギトの弁証法性——　実川　敏夫

アレゴリーの復権をめぐって
——ガダマーとポール・ド・マン——　高田　珠樹

行為の規範としての礼節（decorum）の意義
——クリスチャン・トマージウスにおける法・道徳・礼節の区別——　福田喜一郎

格率とその「枠組み」
——カントの道徳判断論の新しい理解を目指して——　西川小百合

《書評》
福居　純著『デカルト研究』　浅沼　光樹

第一一号（二〇〇四）

カントにおける崇高の経験　牧野　英二

イデオロギー批判の技術哲学
——マルクーゼ・ハーバーマス論争を手掛かりに——　橋本　武志

感性の弁護（Apologie für die Sinnlichkeit）とは何か
——カントの「直観」概念の見過ごされたアスペクト——　長田　蔵人

『純粋理性批判』の反実在論的解釈
——その内実と意義——　千葉　清史

《書評》
武藤整司著『人間の輪郭—共生への理念』　吉川　康夫

第一二号（二〇〇五）

形而上学的認識と超越論的認識
——カントと認識の形而上学・序論——　大橋容一郎

「この私」はなぜ謎を呼び起こすのか
——私に付属する性質が消去された視点からの考察——　冲永　荘八

反現象学の道
——フランツ・ブレンターノにおける非超越論的現象学と個体主義的存在論に基づく直接実在論的認識論について——　次田　憲和

超越論的反省とは何か
——「反省概念の二義性」章の三段構造とその意味——　佐藤　慶太

第一三号（二〇〇六）

根拠律批判から理性批判へ
——「ア・プリオリな総合」の起源をめぐって——　石川　文康

ショーペンハウアーにおける〈物自体としての意志〉概念の導入
——意志の否定と道徳の両立のために——　多田　光宏

《書評》
三つの『純粋理性批判』新訳　佐藤　慶太

編集委員会
委員長　福谷　茂
委員　稲岡　栄次
川﨑　倫史

執 筆 者 紹 介

小林　道夫　　龍谷大学教授・京都大学名誉教授
福谷　　茂　　京都大学教授
浅沼　光樹　　京都大学非常勤講師

（執筆順）

近世哲学研究　　第 14 号

2010 年 12 月 25 日　発行

編集・発行　近世哲学会
編集代表　　福谷　茂
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/
TEL（075）753-2444

印 刷 所　大学生協京都事業連合
ブックプリントセンター
〒606-8106 京都市左京区高野玉岡町 23-3
TEL（075）711-3839

定価 1200 円（本体 1143 円）

STUDIES
in
MODERN PHILOSOPHY

No. 14

Michio KOBAYASHI : Remarques sur la théorie de la connaissance de David Hume 1
—— Par rapport à la théorie cartésienne
de la connaissance ——

Shigeru FUKUTANI : Leibniz on the Creation of the World (1) 15

Kouki ASANUMA : Das Unbedingte und die intellektuelle Anschauung 36
—— Vom *Timaios-Kommntar* zur *Ichschrift* ——
Erster Teil

2010

Published by
Society for the Researches
in the History of Modern Philosophy